

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）

禅研究所『峨山和尚法語』研究班

はじめに

本研究は、平成二七年度に大本山總持寺にて嚴修された總持寺二祖・峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌に関連し、当研究所にて『現代語訳 峨山和尚法語』（大本山總持寺・二〇一六年三月）の発刊に協力したことによ来して行われたものである。

本学における『峨山和尚法語』の研究は、田島柏堂先生以来の伝統があり、書誌学的研究や思想的研究が蓄積されてきたが、未だその中途に留まっている。よつて、昨年度の書籍発刊に引き続き、執筆・翻訳作業に関わった研究員が中心となつて、本法語についての継続研究を行つた。

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

今回の成果としては、文中に引用された語句の出典研究を世に問うものである。既に書籍発刊時に際して、部分的な出典研究は行つていたが、今回改めて、曹洞宗総合研究センター宗学研究部門（旧・曹洞宗宗学研究所）の継続研究「道元禪師・瑩山禪師の引用経論・語録の研究」の手法や成果を参考にし、研究を行つた。

本研究により峨山韶碩禪師の研究が更に発展し、引いては中世の曹洞宗教團に関する知見が拡大されることを願つてやまない。

なお、各研究員は限られた時間の中で研究作業を行い、また、出典研究の方法には十分に習熟したとはいえない状況での成果発表であるため、ご批判は免れないと思うが、

諸賢の御法愛によつて、ご指導・ご教授賜れば幸いである。

凡例

一、本研究は『続曹洞宗全書』「法語」に収録される『峨

山紹碩和尚法語集』の内、『峨山和尚法語（一）』『峨山和尚法語（二）』の二篇への出典研究で、凡例・一覧

表・対照表から構成されている。

一、一覧表は目次と索引を兼ね、事項名・出典・頁数から

なる。

一、対照表は、上段に『峨山和尚法語』の引用箇所、下段

に引用典籍の相当箇所を示した。

一、本研究の底本には『続曹洞宗全書』「法語」所収のテ

キストを元に、長禄四年・禅林書写本を用いて部分的に

修正している。

一、引用典籍については、第一出典をa、第二出典をb、

参考資料をc、更に時代の前後が判明しない場合には参

考としている。それぞれの冒頭に略号を付している。

一、本研究で使用した典籍は、以下の通りである。

『峨山和尚法語』は『続曹洞宗全書』「法語」から引

用し、引用時には頁数・段のみ略記した。

『宏智録』は石井修道編『宏智録（上）』（名著普及会・一九八四年）所収の宋版を参照した。卷数は宋版の内容とし、ページ数は書籍に従つた。

『永平道元』の著作は、春秋社『道元禅師全集（全七卷』を参照。

『伝光録』は『曹洞宗全書』「宗源（下）」所収を参照。

『大正新修大藏經』は「大正〇〇・〇〇〇頁a」等と略記。『正統藏經』は「統藏〇〇・〇〇〇頁a」等と略記。なお、『大正藏』『正統藏』を参照した典籍は、各項目に卷数・頁数等を示している。

※本出典研究は、佐藤悦成先生を班長とし、当研究所の研究員である菅原研州・大橋崇弘・山端信祐が分担して行つた。

一覽表

『峨山和尚法語（一）』

	事項名	出典	底本の頁数	本書の頁数
①	水ハ竹邊ニ向テ流出テテ緑ナリ、風ハ花裡ヨリ過來テ香シ。	参考『義雲錄』	三頁下段	86頁
②	一夜落花雨、満白流水香。	a『続伝灯錄』	三頁下段	86頁
③	靈雲カ桃花ヲ見、香嚴カ竹ノ響ヲ聞く	b『大慧錄』 c『宏智錄』一	四頁上段	86頁
④	夜坐更闌テ眠イマタ到ラス、彌知ル辨道須山林、溪聲入耳月穿眼、此外更無一念心。	a『永平略錄』卷一〇	四頁上段	86頁
⑤	一物アリ、上天ヲササヘ、下地ヲササウ、黒コト漆ノ如シ、常ニ動用ノ中ニ有テ、動用ノ中ニ取コト得ス	b『洞山錄』	四頁下段	86頁
⑥	水清シテ底ニ透ル、魚ノ行コト遲遲タリ、空闊シテ涯ナシ、鳥ノ飛コト杳杳タリ	a『坐禪箴』、『宏智錄』六	四頁下段	86頁
⑦	人人コレコノ光明アリ、ミントモミヘス、闇昏昏	b『正法眼藏』「光明」卷	四頁下段	86頁
⑧	露地ノ白牛逐トモ去ラス	b『宏智錄』四	四頁下段	87頁
⑨	鵠寒ケレハ水ニ下リ、鵠寒ケレハ樹ニ上ル	b『法演錄』中	五頁上段	87頁
⑩	此南臺ニ靜坐ス一炉香、亘日凝然トシテ萬事忘ス、息心ヲ除クハ是ナラズ妄想、都縁無事ニシテ商量スベシ。	a『景德伝灯錄』卷二四「青原行思章」	五頁上段	87頁
⑪	通玄峯頂是人間ニアラス、心外ニ法ナシ、滿目ノ青山	a『法眼錄』	五頁上段	88頁
⑫	水冷シテハ魚物ヲクワス、月明ニシテ碧潭ニ影ナシ	参考『如淨續語錄』	五頁上段	88頁
⑬	末期ノ一句牢關ニイタル、要津ヲ把斷シテ凡聖ヲ通セス	a『圓悟錄』一〇	五頁下段	88頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	
直ニ休スルヲ、八識田中下一刀ト云ナリ。	離諸動定名大坐禪。	悟性論ニ云、十方皆以テ無心、不見捨心名爲見、捨心不怪名大布施、	一翳眼ニ有ハ空花亂墜スト	瓶中ニハ鵝ト云タル	未容擬議賓主歎然	其レ有ト名クヘカラス、トケトモ更ニヒスラカス、豈是無ト云ヘケン	歷歷トシテ妙存シ、靈靈トシテ獨照ス	萬法本ヨリ全體アラハル、	自滅ス、了了トシテ唯眞ノ出家ニアラス	a 『宏智錄』四
七頁下段	七頁下段	七頁下段	七頁上段	七頁上段	六頁上段	六頁上段	b 『人天眼目』卷二	b 『宏智錄』四	六頁上段	五頁下段
90頁	90頁	90頁	89頁	89頁	89頁	89頁	参考 『常光國師語錄』	b 『少室六門』「第五門・悟性論」	c 『雜阿含經』卷三四 c 『大般涅槃經』卷二二	88頁

『峨山和尚法語（二）』

	事項名	出典	底本の頁数	本書の頁数
①	鏡ハ金殿ノ燭ヲ分ツ。	a『禪林僧宝伝』卷一「洞山聰禪師」	八頁上段	90頁
②	山八月樓ノ鐘三答ウ。	a『禪林僧宝伝』卷一「洞山聰禪師」	八頁上段	91頁
③	縁ニ對セスシテ照ス、	a『坐禪箴』、『宏智錄』六	八頁下段	91頁
④	事ニ觸レスシテ知ル、	a『坐禪箴』、『宏智錄』六	八頁下段	91頁
⑤	空闊シテ際ナシ、鳥飛テ杳杳タリ、水清シテ底ニトヲル、魚行テ遲遲タリ。	a『坐禪箴』、『宏智錄』卷六	八頁下段	91頁
⑥	許老胡知不許老胡會、	a『無門闕』第九則・本則	八頁下段	91頁
⑦	無門闕二、凡夫若知卽聖人、聖人若會セハ卽凡夫ト、云云、	a『無門闕』第九則・本則	八頁下段	91頁
⑧	代語云、勞而無功、	a『雲門廣錄』中	八頁下段	91頁
⑨	萬像之中獨露身、	a『宏智錄』二、頌古六四則・本則	八頁下段	91頁
⑩	塵塵獨立ノトキ、全三昧ナリ、此ノ時コソ萬像之中獨露身ヨ、僧雲門二問、如何是塵塵三昧、門云、鉢裡飯、桶裡水、	a『宏智錄』二、頌古九九則・本則	八頁下段	92頁
⑪	又別ノ古則二云、畢竟十五日已前不問、汝十五日已後道將來ト、	a『碧巖錄』第六則・本則	八頁下段	92頁
⑫	森羅萬象、草芥人畜、著著全ク自己ノ家風ヲアラハス、	a『碧巖錄』第六則・頌古への評唱	九頁上段	92頁
⑬	黃龍新和尚云、鷲倚雪巢同中有異、鳥投黑馬、異中有同、黃龍老師雖佗宗、甚得吾家之妙、還辨得金鷄啄破瑠璃印、玉兔挨開碧海門、	a『宏智錄』一	九頁上段	92頁
⑭	宏智上堂云、同中有異、功モ位ニ就ク、	a『宏智錄』一	九頁上段	92頁
⑮	サルホトニ異中ト云、同アリハ同上堂云、異中有同、在位借功、	a『宏智錄』一	九頁上段	92頁
⑯	薪ハ薪ノ位ニ在テ、前後際断シ、灰ハ灰ノ位ニアテ、前後際断ス、	b『正法眼藏』「現成公案」卷	一〇頁上段	93頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

⑯	生也全機現、死也全機現、	a 『圓悟錄』	一〇頁上段
⑯	故ニ云、生死去來眞實人體ト、	a 『正法眼藏』「身心學道」卷	一〇頁上段
⑯	生也不道、死也不道、即是生死ノ根源ナリ、漸源親ク至トモ知ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁上段
⑯	如何是生死根源、須知雲外千峯上、別有靈松帶露寒、	a 『投子錄』	一〇頁上段
⑯	洞山和尚興平ニ至テ卽禮拜ス、興平ノ云、老朽ヲ禮スルコトナカレ、	b 『宏智錄』三	一〇頁上段
⑯	洞山云、老朽ニアラサル物ヲ禮ス、興平云、彼又禮ヲ請ス、洞山云、	a 『宏智錄』三	一〇頁上段
⑯	彼又曾禮セス、	b 『宏智錄』三	一〇頁上段
⑯	雲岩ヒトリノ尼ニ問ウ、汝力父アリヤ、尼云、アリ、雲岩云、年イク	a 『圓悟錄』	一〇頁上段
⑯	ソハクソ、尼云、八十、岩云、汝是父ノ八十ナラサルアリヤ否、尼	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁上段
⑯	云、是怎樣ニ來ルモノニ非スヤ、岩云、猶是兒子ナリ、洞山云、直是	a 『投子錄』	一〇頁上段
⑯	恁麼ニ來ラサルモ、又是兒孫ナリ、	b 『宏智錄』三	一〇頁上段
⑯	洞山和尚病アリ、僧問、和尚病ス、又病セサル物アリヤ、山云、アリ、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	僧云、病セサルモノ又和尚ヲ見ヤ、山云、老僧彼ヲ見ルニ分アリ、僧	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	僧、和尚是ヲ見ヤ如何、山云、卽病者アリト見ス、宏智禪師云、既ニ	a 『宏智錄』一	一〇頁下段
⑯	病アリト見サレハ、卽死アリト見ス、又生アリトミス、又老アリト見	b 『宏智錄』三	一〇頁下段
⑯	ス、四相モウソスコトアタワス、三世モ轉スルコトアタワスト云ヘリ、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	圓悟禪師又云、生也全機現、死也全機現、不道復不道、箇中無背面、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	又生モ一時ノ位、死モ一時ノ位、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	兔馬ニ角アリ、牛羊ニ角ナシ、絶毫絶釐、如山如岳、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	進山主、修山主ニ問テ云、明明生ハ是不生ノ法トシル、何ニトシテカ	a 『圓悟錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	生死ノ所流ヲ蒙ラン、修山主云、筍ハ畢竟シテ竹トナル、今篾ニナシ	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	テ仕コトモ得テンヤ、進山主云、汝向後ニ自悟タラン、修山主云、某	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	カ所見ハカクノ如シ、上座ノ意旨如何、進山主云、是ハ此レ監院ノ	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	a 『圓悟錄』	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、	b 『碧巖錄』第五五則・本則	一〇頁下段
⑯	房、カレハコレ典座ノ房、修山主卽禮謝ス、		

64	飢來レハ飯ヲ喫シ、困來レ報化ノ二佛ハ打眠シテ	b 『碧巖録』第七四則・本則への評唱	一六頁上段	102頁
65	安山ノ松、鬱鬱名松ト一般ナリ	参考『南院国師語録』下	一六頁上段	102頁
66	學人纖毫モ修學ノ心ヲ起サシ	a 『碧巖録』第九九則・本則への評唱	一六頁上段	102頁
67	經云、涅槃無因而體是果	a 『大般涅槃經』卷二八	一六頁上段	102頁
68	非因非果是名佛性	b 『大般涅槃經集解』卷五四	一六頁上段	103頁
69	對面無私モ者、人ニ長短異ナリトイヘトモ、	b 『碧巖録』第一〇〇則・垂示	一六頁上段	103頁
70	舉、僧問巴陵、如何是吹毛劍、陵云、珊瑚撐著月、光吞萬象、	b 『碧巖録』第一〇〇則・本則及び本則への著語	一六頁下段	103頁
71	三更月落照寒潭、	a 『碧巖録』第一〇〇則・本則への著語	一六頁下段	103頁
72	心月孤圓光吞萬象、	a 『碧巖録』第一〇〇則・頌古への評唱	一六頁下段	103頁
73	コノ時境亦非存、莫處無法、光境俱忘ス、又是何物ソ、	a 『碧巖録』第一〇〇則・頌古への評唱	一六頁下段	103頁
74	莫守寒岩異草青、坐看白雲宗不妙、	a 『碧巖録』第一〇〇則・頌古への評唱	一六頁下段	103頁
75	看看頑石動也、	a 『金剛經註』卷中	一七頁上段	104頁
76	頌ニ云、山堂靜夜坐無言、寂寥寥本自然、何時西風動林野、一聲寒雁唳長天、	a 『金剛經註』卷中	一七頁上段	104頁
77	懷州牛喫朱、益州馬腹脹、天下覓醫人、炙猪左膊上、	a 『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱	一七頁上段	104頁
78	蓮花未出水時如何、菡萏滿地流、	a 『宏智錄』二	一七頁上段	104頁
79	布袋和尚偈云、彌勒真彌勒、分身千百億、時時示時人、時人曾不識、	a 『宏智錄』二	一七頁下段	104頁
80	碁逢敵手不藏行時如何、	c 『人天眼目』卷六	一七頁下段	104頁
81	一著不到處、滿盤空用心時如何	a 『信心銘拈古』、『真歇清了禪師語錄』卷二	一八頁上段	105頁
				105頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

『峨山和尚法語（一）』

① 水ハ竹邊ニ向テ流出テテ緑ナリ、風ハ花裡ヨリ過來テ
香シ（三頁下段）

② 一夜落花雨、満白流水香（三頁下段）

③ 靈雲カ桃花ヲ見、香嚴カ竹ノ響ヲ聞ク（四頁上段）

④ 夜坐更闌テ眼イマタ到ラス、彌知ル辨道須山林、溪聲
入耳月穿眼、此外更無一念心（四頁上段）

⑤ 一物アリ、上天ヲササヘ、下地ヲササウ、黒コト漆ノ

参考 水自竹邊流出緑。風從花裡過來香。『義雲錄』大正

八二・四六五b

a 一夜落花雨満城流水香 『続伝灯錄』大正五一・六七

七a

b 靈雲見桃華悟道。香嚴聞擊竹明心。『大慧錄』大正四
七・八四三a

c 香嚴擊竹響而明心。靈雲見桃花而悟道。『宏智錄』
一、三八頁

a 夜坐更闌眠未至、弥知辨道可山林、溪聲入耳月穿眼、
此外更無一念心。『永平略錄』、『全集』五、一一八頁
※『永平廣錄』一〇一偈頌一〇一、『全集』四、二八
八頁

b 有一物。上挂天下挂地。黑似漆。常在動用中。動用中

如シ、常ニ動用ノ中ニ有テ、動用ノ中ニ取コト得ス
(四頁下段)

⑥ 水清シテ底ニ透ル、魚ノ行コト遲遲タリ、空闊シテ涯
ナシ、鳥ノ飛コト杳杳タリ (四頁下段)

⑦ 人人コレコノ光明アリ、ミントモミヘス、闇昏昏 (四
頁下段)

⑧ 露地ノ白牛逐トモ去ラス (四頁下段)

⑨ 鴨寒ケレハ水ニ下リ、鴨寒ケレハ樹ニ上ル (五頁上
段)

⑩ 此南臺ニ静坐ス一炉香、亘日凝然トシテ萬事忘ス、息
心ヲ除クハ是ナラズ妄想、都緣無事ニシテ商量スベ
シ。 (五頁上段)

收不得。『洞山錄』 大正四七・五一 a

a 水清徹底兮。魚行遲遲。空闊莫涯兮。鳥飛杳杳。『坐
禪箴』、『宏智錄』六、四六五頁

b あるとき、上堂示衆云、人人尽有光明在、看時不見暗
昏昏、『正法眼藏』「光明」卷、『全集』一、一四二頁

b 作一頭露地白牛。趁也趁不去。『宏智錄』四、三〇〇
頁

a 驚云。雞寒上樹鴨寒下水。『法演錄』中、大正四七・
五六 b

a 南臺靜坐一爐香。亘日凝然萬事忘。不是息心除忘想。
都緣無事可思量。『景德伝灯錄』卷二四「青原行思
章」、大正五一・四〇一 b

- (11) 通玄峯頂是人間ニアラス、心外ニ法ナシ、滿目ノ青山
（五頁上段）
- (12) 水冷シテハ魚物ヲクワス、月明ニシテ碧潭ニ影ナシ
（五頁上段）
- (13) 末期ノ一句牢關ニイタル、要津ヲ把斷シテ凡聖ヲ通セ
ス（五頁下段）
- (14) 虞凝圓照ニシテ、四大五蘊ヲ透り出、因縁未和合、六
根トイマタ成就セス、胞胎未包セス、情識イマタ流サ
ル時、此眼ヲ得ハ、何ソ悟ラサルコトヲ愁ヘン、カク
ノ如ク悟ルト時、祖師ノ鼻孔、衲僧ノ命脈ヲ收ムルコ
トモ得タリ、ユルスコトモ得タリ、唯我ニ自由ノ三昧
アリ、ユヘニ云、妄ヲ休レハ寂生ス、寂生スレハ智即
アラハル、智生スレハ寂自滅ス、了了トシテ唯眞ノ出
家ニアラス（五頁下段）
- (15) 萬法本ヨリ全體アラハル、（六頁上段）
- a 師後有偈云。通玄峯頂。不是人間。心外無法。滿目青
山。『法眼錄』大正四七・五九一 b
- 参考 夜深水冷魚不餐。滿船虛載月明浮。『如淨續語錄』
大正四八・一三五 a
- a 末後一句始到牢關。把斷要津不通凡聖。『圓悟錄』一
〇、大正四七・七五七 a
- b 虛凝圓照。透出四大五蘊。與因縁未和合像合。根門未
成就。胞胎未包裹。情識未流時。著得箇眼。何患不
了。恁麼了時。祖師鼻孔。衲僧命脈。把定放行。在我
有自由分。所以道。妄息寂自生。寂生知則現。知生寂
自滅。了了唯眞見。『宏智錄』四、三一四頁

九 a

⑯ 歴歷トシテ妙存シ、靈靈トシテ獨照ス（六頁上段）

a 歴歷妙存。靈靈獨照。『宏智錄』四、三一〇頁

⑰ 其レ有ト名クヘカラス、トケトモ更ニヒスラカス、豈

是無ト云ヘケンヤ、其思議ノ心ヲ出テ、遙ニ影像ノ跡

ヲハナレタリ、月ノ如ク、身ハ雲ニ似タリ、所ニ隨ア
ラハレ、物ニ應シテソムカス、塵ニ入トモ混セス、一
切ノ諸空ヲ照シテ、無差別ノ境ニ入リヌレハ、（六頁

上段）

b 不可名其有。磨之不泯。不可名其無。出思議之心。離

影像之迹。空其所存者妙。妙處體得靈。靈處喚得回。

心月身雲。隨方發現。直下沒蹤迹。隨處放光明。應物
不乖。入塵不混。光明。應物不乖。入塵不混。透出一
切礙境。『宏智錄』四、三一〇頁

⑱ 未容擬議賓主歷然（六頁上段）

c 未容擬議主賓分。『臨濟錄』、大正四七・四九七a

⑲ 瓶中ニハ鵝ト云タル（六頁上段）

c 宣州刺史陸亘大夫初問南泉曰。古人瓶中養一鵝。鵝漸
長大出瓶不得。如今不得毀瓶。不得損鵝。和尚作麼生
得出。『景德伝灯錄』卷一〇「宣州刺史陸亘大夫章」
大正五一・二七九b

⑳ 一翳眼ニ有ハ空花亂墜スト（七頁上段）

b 一翳在眼空華亂墜。『景德伝灯錄』卷一〇「福州芙蓉

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

山靈訓禪師章 大正五一・二八〇c

②1 一劫受生ノ骨山ヨリ高シ（七頁上段）

c 有一人於一劫中生死輪轉、積累白骨不腐壞者、如毘富羅山。『雜阿含經』卷三四、大正二・二四二a

c 一衆生、一劫之中所積身骨、如王舍城毘富羅山。『大般涅槃經』卷二二、大正一二・四九六b

②2 悅性論ニ云、十方皆以テ無心、不見捨心名爲見、捨心

b 十方諸佛皆以無心、不見於心名爲見佛。捨心不怪名大布施。離諸動定名大坐禪。『少室六門』「第五門・悟性論」大正四八・三七一a

②3 直ニ休スルヲ、八識田中下一刀ト云ナリ。（七頁下段）

参考 八識田中、下一刀耶。『常光國師語錄』大正八一・三九c ※常光國師は臨濟宗の空谷明応（一三三八）一四〇七のこと。

『峨山和尚法語（二）』

① 鏡ハ金殿ノ燭ヲ分ツ。（八頁上段）

a 鏡分金殿燭 『禪林僧寶伝』卷二一「洞山聰禪師」、統藏七九・五一四b

- ② 山八月樓ノ鐘ニ答ウ。〔八頁上段〕
a 山答月樓鐘 『禪林僧寶伝』卷一一「洞山聰禪師」、統
藏七九・五一四b
- ③ 縁ニ對セスシテ照ス、〔八頁下段〕
a 不對緣而照 『坐禪箴』、『宏智錄』六、四五六頁
- ④ 事ニ觸レスシテ知ル、〔八頁下段〕
a 不觸事而知 『坐禪箴』、『宏智錄』六、四五六頁
- ⑤ 空闊シテ際ナシ、鳥飛テ杳杳タリ、水清シテ底ニトヲ
ル、魚行テ遲遲タリ。〔八頁下段〕
a 水清徹底兮。魚行遲遲。空闊莫涯兮。鳥飛杳杳。『坐
禪箴』、『宏智錄』卷六、四五六頁
- ⑥ 許老胡知不許老胡會、〔八頁下段〕
a 只許老胡知。不許老胡會 『無門閥』第九則・本則、
大正四八・二九四a
- ⑦ 無門關ニ、凡夫若知即聖人、聖人若會セハ即凡夫ト、
云云、〔八頁下段〕
a 凡夫若知即是聖人。聖人若會即是凡夫 『無門閥』第
九則・本則、大正四八・二九四a
- ⑧ 代語云、勞而無功、〔八頁下段〕
a 代前語云、勞而無功 『雲門広錄』中、大正四七・五
六二a

- ⑨ 萬像之中獨露身、（八頁下段） a 眼云。萬像之中獨露身 『宏智錄』二・頌古六・四則・本則、一〇五・一〇六頁
- ⑩ 塵塵獨立ノトキ、全三昧ナリ、此ノ時コソ萬像之中獨露身ヨ、僧雲門二問、如何是塵塵三昧、門云、鉢裡飯、桶裡水、（八頁下段） a 僧問雲門。如何是塵塵三昧。門云。鉢裏飯桶裏水。師云。塵塵三昧。『宏智錄』二、頌古九・九則・本則、一九頁
- ⑪ 又別ノ古則ニ云、畢竟十五日已前不問、汝十五日已後道將來ト、（八頁下段） a 舉雲門垂語云。十五日已前不問汝、十五日已後道將一句來 『碧巖錄』第六則・本則、大正四八・一四五c 第六則・頌古誦唱、大正四八・一四六b
- ⑫ 森羅萬象、草芥人畜、著著全ク自己ノ家風ヲアラハス、（九頁上段） a 森羅萬象。草芥人畜。著著全彰自己家風。『碧巖錄』
- ⑬ 黃龍新和尚云、鷺倚雪巢同中有異、烏投黑馬、異中有同、黃龍老師雖佗宗、甚得吾家之妙、還辨得金雞啄破瑠璃印、玉兔挨開碧海門、（九頁上段） a 黃龍新和尚道。鷺依雪巢同中有異、烏投黑馬、異中有同、黃龍老子雖是他宗、甚得吾家之妙、還辨得金雞啄破琉璃印、玉兔挨開碧海門。『宏智錄』一、六八頁
- ⑭ 宏智上堂云、同中有異、功モ位ニ就ク、（九頁上段） a 上堂云。同中有異、功亡就位。『宏智錄』一、六八頁

- (15) サルホトニ異中ト云、同アリハ同上堂云、異中有同、
在位借功、(九頁下段)
- (16) 薪ハ薪ノ位ニ在テ、前後際断シ、灰ハ灰ノ位ニアテ、
前後際断ス、(一〇頁上段)
- (17) 生也全機現、死也全機現、(一〇頁上段)
- (18) 故ニ云、生死去來眞實人體ト、(一〇頁上段)
- (19) 生也不道、死也不道、即是生死ノ根源ナリ、漸源親ク
至トモ知ス、(一〇頁上段)
- (20) 如何是生死根源、須知雲外千峯上、別有靈松帶露寒、
『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(一) (禅研究所『峨山和尚法語』研究班)
- a 異中有同、在位借功。『宏智錄』一、六八頁
- b 薪は薪の法位に住して、さきあり、のちあり。前後ありといへども、前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちあり、さきあり。『正法眼藏』「現成公案」卷、『全集』一、三、四頁
- a 生也全機現、死也全機現、『圓悟錄』卷一七、大正四七・七九三b
- a 生死去來眞實人體なり。『正法眼藏』「身心學道」卷、『全集』一、四九頁
- b 舉道吾與漸源至一家弔慰。源拍棺云。生邪死邪。吾云。生也不道。死也不道。『碧巖錄』第五五則・本則、大正四八・一八九a
- a 須知雲外千峯上。別有靈松帶露寒。『投子錄』続藏七

（一〇頁下段）

一・七四九a

②1

洞山和尚興平ニ至テ即禮拜ス、興平ノ云、老朽ヲ禮ス
ルコトナカレ、洞山云、老朽ニアラサル物ヲ禮ス、興
平云、彼又禮ヲ請ス、洞山云、彼又曾禮セス、（一〇
頁下段）

②2

雲岩ヒトリノ尼ニ問ウ、汝力父アリヤ、尼云、アリ、
雲岩云、年イクソハクソ、尼云、八十、岩云、汝是父
ノ八十ナラサルアリヤ否、尼云、是恁麼ニ來ルモノニ
非スヤ、岩云、猶是兒子ナリ、洞山云、直是恁麼ニ來
ラサルモ、又是兒孫ナリ、（一〇頁下段）

②3

洞山和尚病アリ、僧問、和尚病ス、又病セサル物アリ
ヤ、山云、アリ、僧云、病セサルモノ又和尚ヲ見ヤ、
山云、老僧彼ヲ見ルニ分アリ、僧云、和尚是ヲ見ヤ如
何、山云、即病者アリト見ス、宏智禪師云、既ニ病ア
リト見サレハ、即死アリト見ス、又生アリトミス、又
老アリト見ス、四相モウツスコトアタワス、三世モ轉

b

上堂舉。洞山到興平便禮拜。平云。莫禮老朽。山云。
禮非老朽者。平云。它且不受禮。山云。它亦曾不禮。
『宏智錄』三、一八七頁

b

雲巖問一尼。汝爺在。云在。巖曰。年多少。云年八
十。巖曰。汝有箇爺。不年八十。還知否。云。莫是恁
麼來者。巖曰。猶是兒孫在。師曰。直是不恁麼來者亦
是兒孫。『洞山錄』大正四七・五〇八a

a

復舉洞山和尚在疾。僧問和尚病。還有不病者麼。山云
有。僧云。不病者還看和尚也無。山云。老僧看他有
分。僧云。和尚看他時如何。山云。則不見有病者。師
云。既不見有病。則不見有死。亦不見有生。亦不見有
老。四相不能遷。三世不能轉。『宏智錄』一、一二頁

スルコトアタワスト云ヘリ、（一〇頁下段）

②4 圓悟禪師又云、生也全機現、死也全機現、不道復不道、箇中無背面、（一〇頁下段）

②5 又生モ一時ノ位、死モ一時ノ位、（一一頁上段）

②6 兔馬ニ角アリ、牛羊ニ角ナシ、絶毫絶釐、如山如岳、（一一頁上段）

②7 進山主、修山主ニ問テ云、明明生ハ是不生ノ法トシル、何ニトシテカ生死ノ所流ヲ蒙ラン、修山主云、筍ハ畢竟シテ竹トナル、今箇ニナシテ仕コトモ得テンヤ、進山主云、汝向後ニ自悟タラン、修山主云、某力所見ハカクノ如シ、上座ノ意旨如何、進山主云、是ハ此レ監院ノ房、カレハコレ典座ノ房、修山主即禮謝ス、（一一頁上段）

a 生也全機現。死也全機現。不道復不道。箇中無背面。

『圓悟錄』大正四七・七九三c

a 生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり。『正法眼藏』「現成公案」卷、『全集』一、四頁

a 兔馬有角。牛羊無角。絶毫絶釐。如山如嶽。『碧巖錄』第五五則・頌古、大正四八・一八九c

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

向後自悟在。修云。某甲只如此。上座意旨如何。進云。遮箇是監院房。那箇是典座房。修便禮拜。『宏智錄』二、頌古七〇則・本則、一〇八頁

㉙ 臨濟大師建立四賓主（一一頁下段）

a 臨濟大師建立四賓主『林間錄』上、統藏八七・二五

○c

㉚ 踞地師子本無窠臼顧佇之間即成滲漏（一一頁下段）

b 踞地師子本無窠臼顧佇停機即成滲漏『人天眼目』卷

三、大正四八・三〇二b

㉛ 壽スレハ窠臼ヲナシ、差ヘハ顧佇ニヲツ（一一頁下段）

b 動成窠臼差落顧佇『人天眼目』大正四八・三二一a

b 動成窠臼差落顧佇『寶鏡三昧』、『洞山錄』大正四

七・五一五a

㉕ 探竿影草入陰界、一點不來賊身自敗（一一頁下段）

b 探竿影草不入陰界一點不來賊身自敗『人天眼目』卷

一、大正四八・三〇二c

㉖ 一喝不作一喝用（一一頁下段）

a 一喝不作一喝用。『臨濟錄』大正四七・五〇四a

- (33) 舉、趙州ノ三轉語、說破云、三段不同（一二頁上段）
a 舉。趙州示衆三轉語道什麼。三段不同 『碧巖錄』第
九六則・本則・大正四八・二二九a
- (34) 趙州ハ三佛ヲ示ス、末後ニ還テ云、眞佛屋裡ニ座スト
(一二頁上段)
a 趙州示此三轉語了。末後却云。眞佛屋裏坐 『碧巖
錄』第九六則・本則への評唱 大正四八・二二九a
- (35) 浸爛鼻孔、タタレヘキナリ（一二頁上段）
a 浸爛鼻孔。無風起浪。『碧巖錄』第九六則・頌古への
著語 大正四八・二二六a
- (36) 懷州牛喫禾、益州馬腹脹（一二頁上段）
a 又杜順和尚道。懷州牛喫禾。益州馬腹脹。『碧巖錄』
第九六則・本則への評唱 大正四八・二二九b
- (37) 天下醫人ヲ覓テ、猪ノ左膊ノ上ヲ炙ス（一二頁下段）
a 天下覓醫人。灸猪左膊上 『碧巖錄』第九六則・本則
への評唱 大正四八・二二九b
- (38) 心未安、乞師安心、磨云將心來、與你安、祖ノ云、覓
心不可得ナリ、磨云、與汝安心竟（一二頁上段）
a 心未安。乞師安心。磨云。將心來。與汝安。祖曰。覓
心了不可得。磨曰。與汝安心竟。『碧巖錄』第九六
則・頌古への評唱 大正四八・二二九c

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

- (39) 人來訪紫胡、紫胡ノ事故ヲ引ハ、新到ヲ見テ便喝シテ
云、狗ヲ看、僧纏ニ首ヲ回ス、便方丈ニカヘル（一二
頁上段）
a 為什麼却引人來訪紫胡。〈中略〉凡見新到便喝云。看
狗。僧纏回首。紫胡便歸方丈。『碧巖錄』第九六則・
頌古への評唱 大正四八・〇二一九c

- (40) 捉賊捉賊、黒地ニ一僧ニ逢著ス、云、捉得也、捉得
也、コノ黒處ハ何處ソ（一三頁上段）
a 捉賊捉賊。黒地逢著一僧。攔胸捉住云。捉得也捉得
也。『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱、大正四八・
二一九c

- (41) 傳大士カ頌ニ云、空手把鋤頭、步行騎水牛（一三頁上
段）
a 又傳大士頌云。空手把鋤頭。步行騎水牛。『碧巖錄』

第九六則・頌古への評唱、大正四八・二一九b

- (42) 人從橋上過、橋流水不流（一三頁上段）
a 人從橋上過。橋流水不流。『碧巖錄』第九六則・頌古

への評唱、大正四八・二一九b

- (43) 菩提本無樹、明鏡又非臺、本來無一物、何處有塵埃
(二三頁上段)

b 菩提本無樹。明鏡亦非臺。本來無一物。何處惹塵埃
『圓悟錄』 大正四七・七七〇a

b 菩提本無樹。明鏡亦無臺。本來無一物。爭得染塵埃
『碧巖錄』第九四則・頌古への評唱、大正四八・二一

(44) 木佛不渡火燒却了、燒却シテ後ハ唯我能知ルカ、是ハ
唯獨自明了、餘人所不見ノ語ト一般ナリ、常思破竈墮
〔二三頁下段〕

(44)
2

(45) カマノ神、天生テ謝ヲ成ス、師云、汝力本有ノ性、吾
力強テ言ニ非ス、神再拜没ス〔二三頁下段〕

c 木佛不渡火〈燒却了也。唯我能知〉常思破竈墮『碧
巖錄』第九六則・頌古及び頌古への著語、大正四八・
二一九c

a 唯獨自明了 餘人所不見 『妙法蓮華經』卷六「法師
功德品」 大正九・五〇頁a

a 我乃竈神。久受業報。今日蒙師說無生法。已脫此處。
生在天中。特來致謝。師曰。汝本有之性非吾強言。神
再拜而沒。『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱、大正
四八・二一九c

(46) 汝本搏土合成、靈從何來、聖從何起〔二三頁下段〕

a 汝本搏土合成。靈從何來。聖從何起。『碧巖錄』第九
六則・頌古への評唱、大正四八・二一九c

(47) 石人機似汝、也解唱也歌〔二三頁下段〕

a 石人機似汝。也解唱也歌。『碧巖錄』第九六則・頌古
への評唱、大正四八・二一九b

(48) 方ニ知ル辜負我、只是未得拄杖子在〔一四頁上段〕

a 方知辜負我。因甚却成箇辜負去。只是未得拄杖子在

『碧巖録』第九六則・頌古への評唱、大正四八・二二

○a

④9 舉金剛經云、若爲人輕賤。（一四頁上段）

a 舉金剛經云。若爲人輕賤。『宏智錄』二、一〇四頁

⑤0 雪上加霜又一重、湯如消水。（一四頁下段）

a 雪上加霜又一重。如湯消水。『碧巖録』第九七則・本則への著語、大正四八・二二〇a

⑤1 コノ時、青青翠竹盡眞如。（一四頁下段）

a 青青翠竹盡是眞如。『碧巖録』第九七則・本則への評唱、大正四八・二二〇b

⑤2 胡來レハ胡現シ、漢來レハ漢現ス、森羅ノ萬象、一切

a 胡來胡現。漢來漢現。萬象森羅。縱橫顯現。『碧巖録』第九七則・頌古への評唱、大正四八・二二〇c

⑤3 自家一念發スル底ノ心、是功德ト。（一五頁上段）

a 自家一念發底心。是功德。『碧巖録』第九七則・本則への評唱、大正四八・二二〇c

⑤4 舉、肅宗帝問忠師ニ云、如何是十身調御、師云、檀越踏毘盧頂上行。（一五頁上段）

a 舉。肅宗帝問忠問師。如何是十身調御。國師云、檀越踏毘盧頂上行。『碧巖録』第九九則・本則、大正四

⑤5 唯佛與佛ノ境界、衆生凡夫更ニ無キナリ、（一五頁上段）

b 若如所言眞言教法唯佛與佛之境界者。『未決答釋』大正七七・八七二c

⑤6 何故萬法皆出於自心、一念是靈ナリ、（一五頁上段）

a 何故。萬法皆出於自心。一念是靈。『碧巖錄』第九七則・本則への評唱、大正四八・二二〇c

⑤7 十身調御ト云ハ、他受用ノ身（一五頁上段）

b 十身調御者。即是十種 他受用身。『碧巖錄』第九九則・本則への評唱、大正四八・二二三b

⑤8 化度利生ノ體ナリ（一五頁下段）

b 胎藏界化度利生他受法樂行相也。『胎藏界三部秘釈』、大正七八・七四b

⑤9 莫認自己清淨ノ法身逐ナリ、（一五頁下段）

a 隆下莫認自己清淨法身。『仏祖歷代通載』卷一三、大正四九・五九八c

⑥0 頌二鐵鎌—黃金ノ骨（一五頁下段）

a 鐵鎌擊碎黃金骨。『碧巖錄』第九九則・頌古、大正四八・二二三b

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

- ⑥① 三千刹界夜沈沈トシテ（一五頁下段） a 三千刹海夜沈沈。『碧巖錄』第九九則・頌古、大正四
八・二二三**b**
- ⑥② 師曰。盲人撫地（一五頁下段） b 盲人摸地『続伝灯錄』卷一三、大正五一・五五〇**b**
- ⑥③ 不知誰入蒼龍窟（一六頁上段） a 不知誰入蒼龍窟『碧巖錄』第九九則・頌古、大正四
八・二二三**b**
- ⑥④ 飢來レハ飯ヲ喫シ、困來レ報化ノ二佛ハ打眠シテ（一
六頁上段） b 飢則喫飯。困則打眠。『碧巖錄』第七四則・本則への
評唱、大正四八・二〇一**c**
- ⑥⑤ 安山ノ松、鬱鬱名松ト一般ナリ（一六頁上段） 参考 寒巖枯木不干春。龍安山下松千樹『南院国師語錄』
下、大正八〇・三〇〇a ※南院国師は臨濟宗の規庵
祖円（一二六一～一三一三）のこと。
- ⑥⑥ 學人纖毫モ修學ノ心ヲ起サシ（一六頁上段） a 古人道。不起纖毫修學心。『碧巖錄』第九九則・本則
への評唱、大正四八・二二二**c**
- ⑥⑦ 經云、涅槃無因而體是果（一六頁上段） a 以是義故。涅槃無因而體是果。『大般涅槃經』卷二

八、大正一二・五三〇 a

⑥8 非因非果是名佛性（一六頁上段）

b 非因非果名爲佛性『大般涅槃經集解』卷五四、大正三

七・五四八 b

⑥9 對面無私モ者、人ニ長短異ナリトイヘトモ、（一六頁上段）

b 垂示云。收因結果。盡始盡終、對面無私『碧巖錄』

第一〇〇則・垂示、大正四八・二二三 b

⑦0 舉、僧問巴陵、如何是吹毛劍、陵云、珊瑚撐著月、光

b 舉。僧問巴陵。如何是吹毛劍。陵云。珊瑚枝枝撐著月

光吞萬象『碧巖錄』第一〇〇則・本則及び本則への著

著語、大正四八・二二三 b

⑦1 三更月落照寒潭、（一六頁下段）

a 三更月落照寒潭。『碧巖錄』第一〇〇則・本則への著

語、大正四八・二二三 c

⑦2 心月孤圓光吞萬象、（一六頁下段）

a 心月孤圓。光吞萬象。『碧巖錄』第一〇〇則・頌古への評唱、大正四八・二二三 c

⑦3 コノ時境亦非存、莫處無法、光境俱忘ス、又是何物 a 境亦非存。光境俱亡。復是何物。『碧巖錄』第一〇〇

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

ソ、（一七頁上段）

則・頌古への評唱、大正四八・二二三c

莫守寒岩異草青、坐看白雲宗不妙、（一七頁上段）

a 莫守寒岩異草青。坐却白雲宗不妙。『碧巖錄』第二五

則・頌古への評唱、大正四八・一六六c

看看頑石動也、（一七頁上段）

a 看看頑石動也。『金剛經註』卷中、統藏二四・五四六b

頌二云、山堂靜夜坐無言、寂寂寥寥本自然、何時西風

動林野、一聲寒雁唳長天、（一七頁上段）

a 頌曰。山堂靜夜坐無言。寂寂寥寥本自然。何時西風動林野。一聲寒雁唳長天。『金剛經註』卷中、統藏二四・五四六b

懷州牛喫朱、益州馬腹脹、天下覓醫人、炙豬左膊上、

（一七頁上段）

a 懷州牛喫朱。益州馬腹脹。天下覓醫人。炙豬左膊上。『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱、大正四八・二一九b

蓮花未出水時如何、菡萏滿地流、（一七頁上段）

a 蓮華未出水時如何。衆云。菡萏滿池流。『宏智錄』二、一二四頁

布袋和尚偈云、彌勒真彌勒、分身千百億、時時示時

a 布袋和尚頌云。彌勒真彌勒師云。拶破面門。分身千百

人、時人曾不識（一七頁下段）

億。師云。築著鼻孔。時時示時人。『宏智錄』卷一、
一四七頁

⑧0
暮逢敵手不藏行時如何（一七頁下段）

c
暮逢敵手難藏行。『人天眼目』卷六、大正四八・三三
一 c

一著不到處、滿盤空用心時如何（一八頁上段）

a
一著不到處。滿盤空用心。『真歇清了禪師語錄』卷二
『信心銘拈古』、統藏七一・七八六 c

『峨山和尚法語』の引用典籍について（一）

菅原研州

—引用典籍の総括

今回の研究によつて、『峨山和尚法語』二篇における引用文の出典典籍をほぼ明らかにし得たと思う。

そこで、当研究の結果得られた知見と継続して研究されるべき課題を、ごく簡単にまとめておきたい。

まず、これら二篇の仮名法語に引用されている文献のほとんどは、峨山韶碩禪師（一二七六～一三六六）の在世時には成立していたものであり、不自然なところは極めて少數だったと判断される。だが、本法語が峨山禪師の親撰との確定はできなかつた。それについては、今後も更に研究を要すると思われる。よつて、以下は峨山禪師によつて提唱されたと仮定して論を進めるものである。

まず、『法語（二）』文中には、明らかに『無門関』と指定した上で、第九則についての提唱が見える。同じく同法語後半には『碧巖録』からの引用が多いが、特に第九六・九七・九九・一〇〇則については、示衆・本則・頌古・評唱・著語の多くを和文に開いて活用されている。何故、この四則がここまで濃密に引用されているのかは更なる研究を要するが、推測を述べることが許されるならば、峨山禪師による『碧巖録』全体への提唱が存在していたのかもしれない。要は現存したのが、偶々この四則分であつたということかもしれない。他の則への言及は、部分的なものも含めれば多く見られるのであるから、『碧巖録』は学人に参考を促していたといえる。そして、これらのことから、峨山禪師門下では、『無門関』『碧巖録』への積極的な参考が始まつていたと理解できよう。

峨山禪師は『無門関』を日本にもたらした心地覚心（一二〇七～一二九八）の門下である恭翁運良（一二六七～一三四一）と交流していたともされ、瑩山禪師が大乗寺を去つた後、恭翁が後住に入った段階でもまだ、峨山禪師は大乗寺に留まつたと考えられているから、『無門関』を所

持し、学んでいたとしても疑問はない。

一方で、『従容録』だと確定できる引用箇所は一箇所もなく、他の二書との相違は明らかである。いうまでもなく『従容録』は、洞上の宗風確立に用いることができそれが、引用の傾向からすれば、『従容録』は用いられずに、他の文献で洞上の宗風を模索されたといえる。

例えば、中国曹洞宗の祖師として、『洞山録』からの引用が複数見られ、また、僅かながら『投子録』や『信心銘拈古』（真歇清了撰）が見られる。『投子録』は、『洞谷記』に依れば、大智禅師によつて瑩山禅師にもたらされたと指摘されるから、峨山禅師も同語録を所持した可能性がある。更に、『信心銘拈古』は、瑩山禅師撰『信心銘拈提』成立の一助になつたともされるが、峨山禅師にその活用例が見られても不思議ではない。

そして、大きな影響が見られるのが『宏智録』である。出典としては、宋版の記述と一致している。宏智禅師については義雲禅師への影響や、瑩山禅師による永光寺開堂法語での影響が知られているから、峨山禅師もその流れにあつたと見るべきであろう。峨山禅師の法嗣である通幻寂

靈禅師は、『宏智録』十三冊を所持し、遺品にしたことが『通幻寂靈禪師喪記』から知られるが、峨山門下で広く活用されたものと思われる。

また、本法語における「偏正五位説」の受容・展開については、『山雲海月』との関連も含めて改めて研究されべきである。他にも、『人天眼目』の参照による機関禪の受容については、中世曹洞宗の宗風確立の経緯を促すものとして理解できよう。

それから、道元禅師の著作は『正法眼藏』について、『現成公案』「身心学道」「光明」巻を典拠と見做しうる。よつて、七五巻本か六〇巻本のどちらかを用いていたと判断しうる。峨山門下では『正法眼藏』を伝授した例（『通幻寂靈禪師喪記』参照。なお、通幻禪師開山の丹波永澤寺には七八巻本が所蔵されるが、『永平正法眼藏蒐書大成』卷六収録の解題に依れば、同写本は通幻親写と判断されていらない）があると知られており、峨山禅師が用いていたと考へても不思議はない。

『永平広録』についても、その引用例があるかどうかを検討したが、『永平略録』と重なる部分は確実に参考され

ているが、いわゆる一〇巻本の『広録』が単独で参照され、いたかは不明である。

更に、非常に悩ましいのが、『如淨統語録』からの引用が自然と考えるべき文脈が見られたことである。『如淨統語録』について、今後、慎重に扱う必要を指摘しておきたい。『宏智録』同様に『如淨録』は、通幻禪師の遺品目録に名前が見え、また、『洞谷記』の記述から、永光寺五老峰に『如淨録』が納められたことは、よく知られたことであるから、峨山門下で洞上の宗風を確立しようとして、『如淨録』が活用された可能性はある。しかし、『統語録』については今後の研究を待ちたい。

他にも、『義雲録』（曹洞宗・永平寺五世義雲「一二五三」）、「三三三」の語録）や『南院国師語録』（臨濟宗・規庵祖円「一二六一」、「一三一三」の語録）や、『常光国師語録』（臨濟宗・空谷明応「一三三二八」、「四〇七」の語録）などとの関連が指摘される。無論、成立年代などに鑑みて、明確に引用されたわけではないだろうが、洞済両門を問わずに、当時の日本の禅門で用いられていた文脈圈に、峨山禪師がいた可能性を指摘するものである。

そして、天台宗を始め、教宗の文献からの影響も見られるが、これは、元々比叡山の僧侶であり、また教禪の宗風の相違を問題にしていた峨山禪師にしてみれば、引用は当然のことである。

二 本法語の記録方法について

文脈から既に理解できることではあつたが、出典研究を通して、本法語は話者の言葉を、聞者が聞き取った形であると確定できた。元々の漢文を漢字仮名交じり文にしているところは、言うまでもないことだが、例えば以下の事例には注意すべきである。

・雪上加霜又一重、湯如消水。

『法語（一）』第五〇番『続曹全』『法語』一四〇頁下段この引用の後半部分は、本来の『碧巖録』第九七則では、「如湯消水」である。しかし、おそらくは話者の言葉をそのまま書いて、「湯」を先に書き、「如」の置くべき箇所を間違えたのである。

他にも、「無情説法」を「無常説法」と記載した例は多く、洞門ではよく知られた同語について、まだ親しめてい

ない学人による記載であるかも知れないと想起させる。

これらの結果、厳密な形での出典研究は困難を窮めたが、書き間違い（あるいは、意図的な音通の可能性もあるが）を推定しつつ検討を行い、今回の成果発表へ至ったことを付言しておく。

また、現在まで『法語（一）』『法語（二）』と便宜的に呼んで伝わったものの、実際には数篇の短編の法語を併せたものであるかもしれない。それは、内容が余りに多岐に渡っていることと、法語の前後で提唱の運び方が相違していることが見て取れるためである。

三 結 論

結論として、本法語は、峨山禪師門下において公案参究が徐々に行わってきた様子を示し、形式としては、特に『法語（二）』では本則に対し「説破云」「代語」「註云」などの用語が見られることから、「洞門抄物」の先駆的の一冊として考えられる。

また、内容からは、全体として洞上の宗風を確立しようとする意図があつたとして良いと思われる。洞上の宗風確

立は、主として坐禅觀の宣揚、公案解釈の独自性の模索などが指摘できる。日本では両祖の時代に比べて、禪宗が一般化したことも考えれば、他の宗派との差異化を図ろうとした可能性もある。

ただし、それがどのような目的で行われたものか、今後の研究を更に継続する必要を感じる。それに、前後する時代の他の法語類や、抄物との関連性についても、更に厳密に見ていく必要があることを指摘して、簡単な結論としておきたい。

参考文献

- 鏡島元隆『天童如淨禪師の研究』春秋社・一九八三年
光地英学等編『瑩山禪』全二巻、山喜房仏書林・一九八五年
一九九四年
安藤嘉則『中世禪宗文献の研究』国書刊行会・二〇〇〇年
『通幻寂靈禪師要記』は『統曹洞宗全書』「清規・講式」所収を参考照。